

春

スモールボートで花見クルーズ

日本一の桜名所 琵琶湖 海津大崎

爛熟

ここ数年桜の季節になるとスモールボートを水辺に浮かべてショートクルージングを楽しんだが、その都度、花見の醍醐味は水上からの眺めだという思いを新たにす。

さて今年は、琵琶湖という大舞台の背景を華やかに飾る海津大崎の桜、その水面をスモールボートが滑る。なんと贅沢な演出のボーディングを写真とともに紹介しよう。

以前にも本誌でレポートしたことがある海津大崎の見事な桜だが、前回は長浜から出航し目的地までの湖面をやや長距離走った。今回は琵琶湖北西の高木浜(マキノ・サニービーチ=駐車場利用、出艇とも有料、詳細は問い合わせが必要)からボートを押し出したため海津大崎まではとても近く、まさにスモールボートならではの手軽な往復クルージングになった。

文=国方成一 写真=山岸重彦(本誌)

まずは琵琶湖と海津大崎の豆知識

琵琶湖はいまさらくどくどく記述する必要もない誰もが知っている日本一の湖だ。しかし海津大崎という場所は意外に知られていない。簡単な地理的説明から始めてみよう。

滋賀県の面積の六分の一を占める湖の周囲は、235キロと相当に大きい。県の全体地図を見ると琵琶湖の周囲を大小の市が取り巻き、ほかには見られない独特の絵図になる。区分け的な呼び名も、琵琶湖を中心に東西南北それぞれに湖東、湖西、湖南、湖北などとわかりやすく四分割されている。海津大崎は琵琶湖の北辺、つまり湖北のほぼ中央にある地名だ。奥琵琶湖に突き出た小さな半島があり、その先端が海津大崎と呼ばれる。水辺には岩礁もあり北面にそびえる山々の木々の緑も美しく、琵琶湖でも屈指の景勝地といえる。

その上、湖岸を走る道路には桜並木が続いているのだから、シーズンには絶好の行楽地となる。近隣からのドライブ観光に人気があり、並木道は車の渋滞の列。これもいたしかたないこの時期だけの例年のにぎわいの一つになって



まるで遠くに半島がある海辺の風景のように見えるあたりは、さすが琵琶湖の大きさだろうか。高木浜の水辺はカヌーなどの小型舟艇に人気があり、シーズンには湖水浴の人たちでにぎわう



オーパ社特製の小型トレーラーは普通車による牽引も楽々。連結部をはずした後の取り回しも一人で無理なくできる



上：オーパボートは分割し、コンパクトにトレーラーへ乗せられる。オール長さもトレーラーの全長にぴったり合ってスマートな収納
下：いざ水面へと漕ぎ出すには、前後の船体を中央にあるバルクヘッド形の楔を差込みしっかり蹴り込むだけ(オーパ社ではその蹴り込むという組み立て方を売り込んでいる)

いるようだ。

琵琶湖の湖水としての成立はかなり古い。しかも世界的にも屈指の古代湖といわれ固有の生物が多く、その点でも貴重な湖である。また、近年になり外来種のブラックバスが激増し、固有生態系を維持するためその駆除なども最近では難問題になっている。そんな学術的なこと以外にも淡水魚を使った鮎寿司など他にはない特産品でも知られ、桓武天皇が大津を都にしたり、秀吉の居城が長浜にあったりと、よく知られた歴史的名所も多く点在する。

今回の海津大崎クルーズは、とにかくあらゆる意味で広く大きい琵琶湖へ(ほんの少しの足がかりにすぎないけれど)スモールボートで湖面へ漕ぎ出そうという試みである。

使用艇は オーパ・クラフトの 分割ボート

今回花見クルーズに使用したスモールボートは、昨年経済産業省から「優れた事業」の認定を受けたオーパ・クラフト社製(本社、

海津大崎へ向かうまでの手前からも、岸辺は霞をたなびかせたような薄いピンクの帯





スモールボートのよさは船外機の走航でも、このように岸边近くまで寄ることができる。観光船にはない楽しみかただ



左：水深が浅くなれば船外機をチルトアップし、ローイングでさらに岸边へ近づける。遠方に見えるパワーボートの位置は、岸边に近づく限界だろう
上：浜へ上陸するかなり手前からエンジンをローイングに切り替える

愛知県大府市大東町の、小型トレーラーに乗せてもよしという分割式のコンパクトなボートだ。その組み立て分解のシンプルさ(慣れるとわずか10秒の組み立て及び分解というのがメーカーの売り)と、丈夫な作りが定評の分割ボートには、最近になってバラエティーに富んだオプション部品も増え、主にスモールボート・アングラーに人気が高い。装備品の中でも左右両舷に取り付けるフロート(オプション品)は優れモノだ。これにより小型ながら沈没や転覆といった不



大きな観光船も桜見物。雪をかぶった山々も琵琶湖ならではの背景だろう

測の事態を回避できる比率は格段に向上した。また前方デッキのウォーターブレイカー(オーパ社呼称=これもオプション部品)なども新設されグレードアップしている。

ローイングで出てエンジン始動のマナーを遵守

出航した浜はJR湖西線のマキノ駅に程近いマキノサニービーチと呼ばれる砂浜。と言っても水際はかなり小さな粒の石の集まりで足元の感触は細かい砂利で砂とはやや違う。この浜はキャンプやカヌーなど主に家族単位で楽しめる施設が充実しており、湖北で人気の高いレジャースポットのひとつになっている。

夏には海水浴ならぬ湖水浴でもにぎわうマキノサニービーチの浜では、エンジン付きボートの出航、入航を禁止している。

従ってこの時も、実際にはこの浜からの動力艇の運行はダメなのだが、今回、マナーを確実にキチンと守ると確約して許可をもらい出航した。船外機を搭載した使用艇だがローイングで出航し、沖合いまできたらエンジンを始動する(もちろん帰港時も同じくエン

ジンを止めローイングで)という安全重視のボーティングが条件での許可である。

こうしたマナー遵守は今後のスモールボート普及にとっても大切なことだ。

マナーばかりでなく浜から出航するテクニックにおいてもいきなりエンジンを始動するのが難しいこともある。琵琶湖のように静かな湖沼などであればよいが、外洋に面した海辺ではうねりのあることが多く、手際よくローイングで難所を乗り越えてからエンジンにとりかかるといった方法が望ましい。始動の作業をしている最中にうっかり横波でも受けるとトラブルのもとになる。

大型船に注意しながら小型ボートの利点を生かす

ボートを水面へ押し出したらローイングでかなりな沖合いまで漕ぎ出し、2馬力のエンジンをスタートさせた。目的地の海津大崎は見えているが、ハンディーのGPSを使用し無駄のないコースを引きまっすぐ向かう。湖沼などでは潮流の影響がないためコースを維持するのが楽である。

右手の沖合いには、琵琶湖でも景勝地として有名な目印ともなる



海津大崎の桜見物は、岸辺からこのくらいの距離を走るのが適しているようだ

竹生島も見えている。周囲2キロほどのこの島には定期船が発着する船着場もあり、有料だが棧橋へ舟を着けることもできるらしい。古くから信仰の島としても知られ、上陸する観光客も少なくない。

この時期に限っては、道路ばかりでなく湖面にも観光用の大型船や小舟が各種いりまじり(ここでは陸上の車と違い渋滞はないが)行き交う船同士は、常に操縦者が視線を360度に配っていなければならない。なかには乗客600人以上の超大型の観光船(29ページの写真参照)が海津大崎の桜を眺められるコースを走る。このような

大型船を見ると、さすがに琵琶湖ならではの広い湖面を感じさせる。

これらは琵琶湖汽船が運航する大型船でミシガン(全長59メートル、787人乗り)とピアンカ(全長66メートル、604人乗り=写真)などいずれも船内でのイベントなどにも趣向をこらし、琵琶湖周航クルーズには多くの客を呼んでいる。その他この時期だけの、大きさがさまざまな観光船もあり、それに個人所有のパワーボートも見物に走り回るから、スモールボートの操縦者としては桜ばかりに見とれているわけにもいかない。

それでも、スモールボートの深



スモールボートで最接近すると遠くの景色の中にあつたピンク色も、あらためて違う美しさを見せてくれる

さは20センチくらい、2馬力船外機の先端でも水面より50センチ程度だから、各種の大型観光船が行き交う水面よりさらに岸辺まで寄せることができ混雑が避けられるのが利点だ。

さらに船外機をチルトアップしたローイングでは岸辺ぎりぎりまで寄せられ、よい場所があれば接岸し上陸も可能なのだ。事実多くのカヌーもいたるところで見かけ、こうした軽便な舟艇は満開のピンク色が垂れ下がる枝の下を潜り抜け岸辺に乗り上げては、ランチタイムやちょっとした休憩を、桜の花見気分楽しんでいた。

岸づたいにそうした風景を眺めながら浜を出ておよそ20分弱で海津大崎へ到着。岸辺はいたるところ満開の桜、桜、桜、……すこぶる豪華な眺めだ。

琵琶湖八景の「海津の桜」は「全国桜名所100選」

竹生島や彦根城などとともに琵琶湖八景にも選ばれている花見の名所は、その昔大崎トンネル開通(1936年)を祝って植樹されたと言われ現在に至っている。およそ80年近い歴史があるとは驚きだ。もちろん桜の木の寿命もあるから時代の変遷にともない多くの人の手がかかり、今日まで咲かせ続けることができているのだろう。その美しさは湖畔を走る県道557



このサイズの観光船が、かなりのスピードで次々とやってくる。こうした観光地におけるスモールボートの操縦には、桜ばかりでなく常に周囲を見渡す余裕が欲しい

号線沿道に数え切れない数量の桜並木が延々4キロもつながり、湖面から眺める風情はスモールボートのクルージング冥利につきる。全国的にも「桜名所100選」に選ばれるなど近年海津大崎の知名度は上昇している。

岸に寄せ上陸を試み、上天気の中で十分に桜を眺めたあと、もと来た浜へ触先を向ける。浜の手前150メートルくらいからはローイングに切り替え静かにランディングし上陸する。砂浜ではないのでボートを引きずらずと船体表面を傷めるから、ひとりの時はドーリーを使用しできるだけボートに優しい扱いをするのもボートマンシップの見せ所だ。

お薦めしたい スモールボート・ ショートクルージング

こうしたボートによるショートクルージングが楽しめるのもスモールボートならではの。まず車に搭載し好きなところへ運べるというのが大型艇と違う大きな利点だからだ。特に今回のような分割ボート、それにインフレーターボートなどコンパクトになるタイプはさらに積載及び運搬が便利である。

しかも小型のため手軽に水辺へ下ろせる場所も多く、上げ下ろしの際もクレーンなど重機を使用する必要もない。大きさや速度の点では

長距離及び長時間の走行が不得手なスモールボートでも、この車内積載やカートップまたはトレーラーといった方法で水辺まで運搬できる。行動範囲は大きく広がるのだ。

スモールボートの長距離航行は難しいと前述したが、琵琶湖のような湖沼であれば、季節と天候を十分に検討し最良の日を選ぶことで、南北およそ60キロ弱の沿岸クルーズも可能だろう。もちろん、燃料補給や途中休憩の余裕も考え、早起きしてまる一日のデイクルーズをしてみたいものだ。

およそ時速8km/hから9km/hの巡航速度がでる2馬力エンジンなら、8～9時間の航行で琵琶湖を縦断できそう。ただし繰り返すが気象状況を十分に把握することは必須条件である。小さな湖沼と

違い琵琶湖は大きく、周囲には高い山も多く気象変化の激しいことでも有名だ。海洋とは違った突然の変化も十分に頭へ入れておく必要がある。

琵琶湖は近隣の県や東海地方、そして遠く関東からでも、道路を走って湖北の海津大崎に近い高島市マキノ町まで来ることができる。

東からは東名道路、北陸道を利用し木之元インターより一般道で西へ向かうというアクセス方法があり、南からは京都や大津を経由し湖周道路もしくはバイパスでマキノ町へというルートもある。北の若狭湾からでも40数キロほどで来ることができる湖北は、スモールボーターにとっては格好のゲレンデと言えそうだ。



遠方に見えるのは竹生島



スモールボートやカヌーなど小型の舟艇だと、桜の遠望ばかりではなく岸辺に上陸しその木の下でランチタイムも楽しめる



この時期は底にあるこぶし大の石ころがはっきりと見えるほど、まだまだ湖面の透明度は高い